

以上本章に於て述べたる所は、専ら神代より平安朝の末期、即ち本村が開發せらるゝに至る迄の住吉の、國史上に於ける地位を畧述せるものにして、同時に此の附近の地形の變遷の様を記したるものなれば、本村の地が其の開發前に如何なる状態にありしか、又同時に其の國史上に如何なる關係を有せしものなりしやは、略之を推察し得らるべし。

こはま(こす)

本村は村内の舊記中在家明細帳に依れば、應保元年始めて粉濱村の稱を用ひたりとなす。而してこはまなる名稱の何れの時代より、又如何にして起りしかは、全然之を知る由なれども、萬葉集に

住の江のこはまの蜆あけもみすこもりのみやも戀わたりなん

讀人知らず

と讀める歌あれば、こはまなる名稱は餘程古き時代より用ひられたりしを知り得べきなり。而して其の如何なる理由に依つてこはまと呼ばれしかに就いては、左の如き説をなすものあり、即ち

粉濱は木濱(こはま)の轉訛せるより起れる地名にして、木濱の名は住吉神社造營の用材を置きし土地なるより起れるものなり。彼の四天王寺造營の用材を置きしより木津の名の起れるに徴するも、首肯し得べき理なり

と或は然らん。即ち本村の南邊住吉公園との間に流るゝ小溝は、もと幅員三間餘を有し、其の名を材木

川と稱せり。而して其の名の起れるは、文化元年住吉神社の炎上の厄に逢ひたるを造營せし時に、用材の運搬を便ならしむるがために、俄かに開鑿せられたる川なれば、斯くは名づけたるものなり。されば是れに依つて見るも、一應尤もなる説なりとなさざるべからざるが如くなれども、直ちに之を以て眞なりとなす能はず、されば粉濱なる名稱の起原に就ては、尙ほ充分なる考究の餘地を存するものなしとせず。本書は唯之を以て後日の料に資せんのみ。

又此の地をこすとも謂ひ

夫木集

住吉のこすのどこなつさくも見す陰れてのみや戀わたりなん

讀人知らず

家集

住吉のこすのどこなつそれなから岸野の草の花もわすれす

藤原定家

などの古歌に見るところなれども、其の由來詳かならず、或はこはまより轉訛したるものならんか、尙ほ考ふべし。即ちもと本村の地は住吉浦又は津守浦の一部なれども、こはま又はこすなる名稱は最も早くより用ひられたるものにして、應保元年始めて村名を稱するに粉濱村の稱を用ひたるも、之等の古き名稱に依れるものなるべし。

粉濱村の開發

現時の本村の地が遠き古代に於ては、全然渺茫たる大阪灣の一部に屬したりしは、既に述べたるが如

くなれども、時代の推移と共に年々に淀川より流出する泥砂と、潮流の關係に依つて漸次海底露出するに至れり。斯くて始めは一面の蘆原と化し、未だ何人も此の地を開拓するものなく、自然の儘に放任せらるゝところなりき。而して斯くの如きは獨り本村の地のみにあらず、廣く今の大阪市及び西成郡の大部分に亘りしものゝ如く『難波の蘆原』又は『難波の片葉の蘆』等の名の著はるゝを以て見んか、恐らく附近一面の蘆原なりしものゝ如し。然るに平安朝の末期源平兩氏の争亂甚だしかりし頃、彼の保元の亂に破れたる源氏の一族の各地に四散するに當りて、其の一味なる駒井左衛門(兼綱)を始め十餘名の者は其の一族と共に、住吉に落ち、暫らく平家の眼を忍びたりしが、やがて之等の人々は附近に耕地を求めて、夫々農業に従事することとなり、茲に保元二年三月初めて駒井左衛門及び佐原彦八郎(行宗)、早川五郎次(爲信)、松本太三郎(重泰)、村岡又三郎(滿頼)、山野新右衛門(成近)、本田太八郎(常清)、澤井十左衛門(公則)の八名は協力して、當時一面の蘆原として何人も顧みざりし此の地の開發を企て、同年五月には二十九町一反八歩の地を地割繩張して、之が開拓の準備を整へ、是より更に四年半の歲月を経て、應保元年十一月十六日に至りて開發全たく成りしかば、茲に一族七十餘人は居を此の地に構へて一村を形成するに至れり。是れ實に紀元千八百二十一年の事にして、今より七百六十四年前のことなり。尙ほ當時の村落は今の十三間川の東岸にして、稍村の北部に偏せる現時の字古屋敷と稱する所にして、即ち其の字名の古屋敷と稱するは、開發當時の村落の跡なればなりと謂ふ。斯くて其の子孫は代々

農業に従事し、漸次繁榮して村は次第に發達するに至れり。されば後世前記の八名を本村開發の祖とし、其の直系の子孫は之を粉濱八家又は祭禮仲間と稱し、後世他よりの移住者漸次増加せる後に至りても、常に村の中堅として舊幕時代には専ら粉濱家の者のみを以て村政に參與せしめたり。而して今尙ほ其の子孫の村内の舊家として残れる者多し。

尙ほ茲に留意すべきは、本村の村落が始め村の西北部に發達したる事なりとなす。即ち本村の地は其の位置住吉村に連なり、而かも住吉村は既に古くより村落の發達せるものあり、されば始めて之が開發をなし、新たなる村落を營むに際しては、其の位置は當然住吉村の村落に最も近き場所を選ぶべきを至當なりとなす。即ち本村の村落が後漸次村の東南部なる住吉に近き位置に移されしに徴するも見易き道理なり。然るに本村が開發の當時住吉の村落より最も遠隔の地に村落を營なまれば、一見頗る奇異の觀なくんばあるべからず。然れども詳細に之を考察せんか、元來此の地は海底の次第に露出して陸地と化せる土地にして、而かも此の附近の海面は潮流の關係上海岸に最も接近せる部分は稍深く、幾分海岸より遠ざかりたる所に淺き場所あるを常とせり。されば其の海面の陸地と化するに當りても、海岸より數町を隔てたる所先づ陸地となり、海岸に近き所は幾分遅るゝは當然の事にして、本村が開發せられたる當時は、陸地と化してより歲月尙ほ淺かりしかば、西部の十三間川に近き附近は完全なる耕地となし得らるゝに反し、住吉に近き部分は未だ完全なる耕地とならざりしがために外ならず。尙ほ本村と稍其の

開發の年代を同じうせる隣村勝間村が、其の村落は西部に偏したるが如きも、同一の原因に因るものなり。又本村が西部に高岸、高畑、古屋敷等の字地あるに徴するも、此の附近が昔時最も土地高燥なりしを知るべきなり。されば其の附近に最初村落の發達せしは、極めて當然の事なりとなさざるべからず更に反對に此の事實に従つて推察するも亦、此の地がもと住吉浦の海底に屬したりしは容易に之を想像し得らるべし。

附記

村内の舊記中在家村由緒記に依れば本村開發者の筆頭駒井左衛門兼綱は弓の名人にして後家を一子兼友に譲り身は治承四年六月二十三日宇治平等院に以仁王を救はんとして殿戦して遂に戦死す。而して國史に依れば治承の亂には源行家以仁王の令旨を奉じて各地を歴説して諸國の源氏皆奮起して令旨を奉じたりと謂へば或は源氏の一族なる此の地の駒井左工門も亦之に應じたりしなるべし。然れども弓の名人にして云々は當時頼政の子に檢非違兼綱なるものあり父と共に弓の名人にして治承の亂に戦死せしかば恐らくは後世同名なるところより強いて之を附會せしものならん

中在家村 附駕輿丁の由來

中在家村由緒記に依れば、粉濱村は其の開發せられて後百三十九年を経て、鎌倉久明將軍（北條貞時久明親王を奉じて將軍となす）の治世、即ち永仁六年（六百二十七年前）八月住吉神社々務津守國冬の時、始めて住吉神社の社領となり、夫より百五十五年を経て享徳二年（四百七十二年前）二月三日の夜

全村火災に罹りしかば、同年三月村を南方なる現在の地に移し、以來村名を中祭家村と改稱せり。斯くて後明應三年（四百三十一年前）十一月には更に村名を中在家と改め、引續いて住吉神社の社領なりしが、織田信長の各地を平定するや、天正五年（三百四十八年前）社領の大部分を沒收して之を自領となせしかば本村亦其の所領に歸す。尋いで豊臣氏亦之を自領となし、豊臣氏の滅亡するや、徳川氏亦之を自領となし以て明治維新に至れり。而して村は獨立の一村として庄屋一人を置き、駒井左工門の子孫代々之に任じ、年寄、百住代は他の粉濱祭禮仲間より之に任ずる事とせり。斯くて明治維新後庄屋の制度廢れて後も、村は暫らく獨立したりしが、明治十九年三月二十七日今在家村と合併して、新に粉濱村となるに至れり。

中在家村は往時より住吉神社の六月荒知大祓神役の駕輿丁を奉仕するの例にして、近く明治三十年の頃まで毎年之に奉仕せり。是れ實に本村が住吉神社と特に深き關係を有せる所以にして、今左に其の由來を述べんに中在家村由緒記に駕輿丁の由來として

住吉神社駕輿丁の儀は、明應二癸丑年住吉社焼失の砌、神輿當村へ昇來り、諸人昇上ぐるも雖も不動、當村粉濱家子孫の者打寄り昇上ぐる所かるく、先づ鎮守粉濱社に奉据置、住吉社へ達、神輿請取の役人植木日向守長持、島居甲斐守忠俊なり。神輿粉濱子孫の者奉昇送、同三甲寅年正月、住吉社祭禮駕輿丁粉濱家の者より相勸旨、神主津守國則公御書付被下置（此書今以庄屋駒井氏に傳來）天正五丁丑年織田信長公、神社佛閣所々滅地の節、當村御料所に相成候得共、先の以由緒六月荒知大祓神役駕輿丁相勸來り候

（以上は原文の儘）

とあり、されば是れに依つて其の由來は自ら判明すべし。

尙ほ本村が獨立の一村として、住吉の屬地を離れたる後に於ても、住吉の地は屢々國史上重要な事項の起りし事あり。即ち後村上天皇が前後二回に亘りて住吉に行在し給へるが如き、又南北朝の頃屢々戰場として兵馬の來往頻繁なるが上に、北畠顯家の阿部野の役、楠木正行の遠里小野の役等、北の附近が屢々戰場となりし事あり、次いで細川兩家の争亂には又此の附近が争亂の巻となれる事あり、更に慶長元和の大阪の役には、住吉附近が東軍の根據地として最も重きをなせしが如き幾多の事例あり。然れども獨り本村の地は殆んど之等の記録に其の名を止めたるを見ず。是れ蓋し本村の地が土地平坦にして東方には住吉の高地の連なるものあり、ために兵を用ふるに便ならざりしかば、左程利用せらるゝ事なかりしがためなるべし。

今在家村

中在家村に就ては村内に今尙ほ一部舊記の残れるものあれば、略其の沿革に就いても之を知り得べしと雖も、今在家村に關する舊記の全たく残れるものなければ(村内に舊記の存せざるは代々本村の庄屋たりし村上氏の邸宅の明治維新前に全焼の厄に逢へるが上に其子孫は他に移住して村内に残れるものなくために舊記の類も全たく散逸せしものなるべし)従つて其の古來よりの沿革に就いても、殆んど之を

探究し能はざるは、頗ぶる遺憾なりとなさざるべからず。即ち古來本村は中在家村と對立して、獨立の一村をなせるものなれども、其の如何にして起れるものなるやは詳らかならず、口碑の傳ふる所に依れば、是れもと粉濱村の一部にして、其の中在家村と改めし當時の分村なりと謂ふ。而して他に之を否定すべき有力なる反證を見出す能はざれば、本書は暫らく此の口碑に隨ふこととせん。更に維新前の村内の状況を見るに、之亦其の詳細を知る能はざれども、中在家村の粉濱家に比すべき村内の舊家として、姓を用ひたるもの、村上、那須、高間、豆半、鷗等の數戸ありて庄屋は代々村上氏の世襲する所にして年寄、百姓代等は前記諸家の内より之に任じたること中在家村に同じ。

尙ほ本村は其の由緒すら詳かならざれば、國史上にも亦全然其の存在を認めらるゝ事なかりしは勿論のことなり。然れども慶長十九年の大阪冬の陣の際、東軍の先鋒藤堂高虎は十月龍田越より河内に入り二十九日には和泉の大仙陵に屯し、其の先頭隊渡邊は進んで住吉村に入りて陣す。更に十一月五日には高虎も進んで住吉村に入り、神社を脊にして阿部野道に面して陣を敷き、此の日福島長門の大阪に入らんとして海路住吉に至るを、高虎の兵捕へて其の兵二十餘人と共に住吉濱に梟す。次いで同七日には東軍の本多忠政は阿部野に、井伊直孝は住吉に夫々陣しければ、高虎の一隊は今在家に入りて陣し、此の地に留まる事十日にして、十七日更に進みて天王寺に入れり。

是れ本村が戰史に録せらるゝ唯一の記録にして、當時高虎の陣せしは獨り本村のみにあらず、中在家

村にも及びたりしや必せり。尙ほ此の他にも細川兩家の争亂續きたりし當時、隣村たる住吉村はもとより勝間村、今宮村等が兵馬の來往頻繁なりしと謂へば、恐らく當時にありても此の附近が、亦兵馬の來往甚だしかりしを想像し得らるべし。然れどもこは全然記録の徴するものなければ、今之を詳かにする能はざるなり。

備 考

今在家村は中在家村の分村にあらずして、始めより全然別個の村なりと見らる、點渺ならず、即ち其の理由を記せば

一 今在家村が粉濱村より分村して後に獨立したるものなりとせんか、今在家村内に必らずや粉濱家の子孫の、村内の舊家として残れるものあるべき筈なるに、村内に全然之を見る能はざるなり

二 若し兩村がも同一村なりせば、中在家村由緒記に今在家村の事も當然載する所なからざるべからず、然るに同記には全然之が見るべきものなし

三 今在家村の松岸寺の縁起に依れば、同寺はもと天台宗の一草庵にして、治承の頃那須與市宗高の此の地に來りて、其の一族を残して去れりと謂ふ。(後章佛閣松岸寺の項參照)而して治承は粉濱村が始めて開發せられし應保元年より、僅かに十數年を隔てたるに過ぎず、而かも當時既に草庵ありしと謂へば、附近には其の以前より村落の發達するものなからざる可からず、さればむしろ今在家村の開發は粉濱村より古しとなさざる可からざるなり

即ち以上の三點は今在家村が中在家村と全然別個のものなりとす要點なり

而して又其の反面に於て兩村がも同一村なりとす理由は

一 兩村の村落は其の位置互に極めて接近せること

二 而かも兩村の境界は極めて複雑にして互に犬牙錯綜したるが上に、兩村の飛地は相互に各所に點在せるものあり、到底之を區

別し得ざる程なり、されば是れも同一村なりしを後に分離せしものなる事を證するものなり

三 中在家と謂ひ、今在家と稱する其の村名が明かに兩村の姉妹村なることを證するものなり

四 兩村はも同一村なりしが後之を分離して二村とせしものなりとの、口碑の傳へらるゝものあるは本文に記載せるが如し

尙ほ双方何れの點に就きても之を詳細に論究せんか夫々議論なきにあらざれども其の決定は更に今後の研究の結果に俟つこととし今は暫らく口碑に隨ふこととせん

新 家 附 紀州街道

新家は村の東部紀州街道に沿へる一部落を稱するものにして、其の名は後に新らしく開けたる村落の謂なり。即ち攝津志村里の條に『新家、中在家今在家二村出戸』と記せるが如く、中在家、今在家兩村の屬邑にして、紀州街道の東側は其の大部分は中在家村に屬し、其の一部及び道路の西側の全部は今在家村に屬す。然れども此の地は其の位置住吉村に接し、且つは往時より住吉神社の社頭に連なり、神社に依つて繁昌したるものなれば、一に住吉新家又は住吉町と稱し、恰かも住吉村の屬邑なるが如く見られたりしなり。此の地は昔時より紀州街道に面し、殊に住吉の社頭に連なれるものにして、街道往來の旅客並びに住吉社參の客は素より、四時遊客の來往頗ぶる頻繁なりしかば、料亭茶店等軒を連ねて頗ぶる繁昌を極めたるものなり。従つて人家密集して純然たる一村落をなし、住吉新家の名は住吉の一名勝として遠近に知られたり。即ち徳川の末期に著はされたる攝津名勝圖會にも

新家町、此の地の名物は金魚、鮓、蛤、ごろ／＼煎餅、蕃椒、昆布、竹馬、糸細工、麥糞細工等なり
兩側に貨食の家列り三文字屋、伊丹屋、昆布屋、丸屋など莊を風流に營なみ、鱈魚の鮮きを以て饗應
し女奴は粧粉を施し、蔽膝の赤きに天鵝絨の襟、松金油に雲鬢を薫らせ、酒を勤めて聲をかしく拍子
とり、來客は千里の波濤も一帆の順風に利潤を得て、先づ黒江の大神に慶の祝祠を捧げて此の酒旗に
來り、其の勇威を顯はしけるも、みな神徳の餘光なるべし。

とあり、是れ即ち當時の新家の商家旗亭等軒を連ねて遊客の絶ゆることなく、いと賑やかなりし様を記
せしものにして、是れに依つて見るも舊幕時代に新家の地が、如何に繁昌せしかは略想像し得らるべし
而して新家が何れの時代より起り、且つ繁昌せしかに就いては記録の徵すべきものなければ、詳かに
之を知る能はずと雖も、具さに四圍の状況に依りて之を考究せんか、元來紀州街道なるもの、此の地に
通じたるは、其の年代比較的後世の事に屬すべく、平安朝以前の未だ本村の附近が開拓せられざりし時
代にありては、紀州に通ずる道路は略現今の住吉村の中央部を通ずる、俗に小栗街道と稱すべき道路に
して現今の阿部野街道に當りしもの、如し。即ち藤原定家卿が建仁元年（七百二十四年前）後鳥羽上皇
に扈從して、紀州の熊野權現に參詣したる節の『熊野山御幸記』に

阿部野王子と云ふ社より、住吉の神社に御參詣相成り、それより御乗馬にて、堺王子に至りまし云々

とあり、又當時京都より熊野に往復する道路の各所に王子なるもの、設けらるゝありて熊野參詣の往復
の途次に立寄りて、或は休憩し、或は遙拜する場所に當てたり。世に之を九十九王子となす。而して熊
野山御幸記の阿部野王子は九十九王子の一にして、現時の天王寺村なる阿部王子神社は即ち是れなり。
又阿部野王子と堺王子の中間に住吉王子なるものあり、而して其の所在は住吉名勝圖會に依れば、現今
の墨江村の阿部野街道に沿へる、墨江尋常高等小學校の附近なりしもの、如し。されば之等の王子の所
在に依つて見んか、當時の通路は専ら小栗街道なりしは、極めて明白なる所なり。更に其の後鎌倉時代
には京都の勢力著しく衰へしかば、熊野參詣も昔日の如くならず、又住吉附近に於ても重要な事項の
起れるものなかりしかば、此の地方の通路に關する記録の存するものなく、従つて此の附近の通路の状
況は之を詳かにする能はざれども、更に此の附近の村落發達の状況を見んか、保元應保の頃には粉濱村
の開發せらるゝあり、更に仁治年間には勝間村の開發を見る等、漸次岡陵の西方なる低地に村落の發達
を見るに至れりと雖も、尙は當時之等の村落は何れも其の位置西部に扁し、現時の紀州街道の附近には
村落の發達するものなかりき。されば當時尙は此の附近には現今の紀州街道に相當すべき道路の發達す
るものなかりや必せり。

更に南北朝の頃より戰國時代にかけての二百數十年間には、北畠顯家の阿部野の一戰を始めとして、
正平三年の楠正行の住吉の役あり、更に後細川兩家の争亂起るや、堺、住吉、天王寺附近が屢々戰場と

化し、續いて三好氏の侵略一向一揆、織田信長の攝津平等の際にも此の地附近が戰場と化せし、實に其の幾度なるを知らず、従つて當時兵馬の往來頗ぶる頻繁なるものあり。而して今之等の幾多の兵戦の跡を見んか、その戰場は何れも東方の高台にして、本村の附近が戰場となれる記録は殆んど之を見る能はず、従つて兵馬の往來は殆んど東方の高地のみに限られたるもの、如し。勿論こは本村の附近が土地平坦にして、兵を用ふるに不便なるに反し、東方の高地が戦術上極めて便利なりしにも依るべけんも、又一面には此の附近に道路の發達するものなかりしにも依るものなりとなすを得べし。されば之等の事實に徴するも、當時尙ほ現今の紀州街道の通ずるものなかりしを知るべきなり。

尙翻つて村内の舊記に依つて是れを見んか、既に中在家の項に述べたるが如く、始め粉濱村が其の位置西部に扁したりしが、後享徳二年全村火災に罹りしかば、村を東南方なる現在の地に移轉せり。而して若し當時現今の紀州街道にして既に存在したりしならんか、必らずや村落はその道路の附近に移轉せらるべき筈なるに、事實は然らず。是れ明かに當時紀州街道の存在せざりし事を立證するものなりとなさざるべからず。

然らば現時の紀州街道なるものは、何れの時代より始めて史上に其の存在を認められしかを見るに、天正年間豊臣秀吉の此の街道を通行して、紹鷗森（天下茶屋なる天神の森を謂ふ）の清水を汲みて茶を點せしめし事は、天下茶屋の由來として極めて有名なる所なり。されば當時既に大阪より住吉、或は堺に至るに専ら此の街道を通行せしは明かなり。又安立町がもと叢松原と稱し、人家の存するものなかりしに安立なるもの、此の松原に庵を結びしより漸次人家を増して、遂に安立町を形成するに至りしなりと謂ひ、而してその時代又略之と相前後せり。殊に天下茶屋なる芽木氏の古文書に依れば、當時秀吉の休憩せし茶店は芽木光立と謂へる者、住吉の奥天神の附近より日々紹鷗森の附近に來りて茶店を營なみ日没と共に住吉に歸りたりしといへば、恐らく其の以前には附近に茶店は素より民家も存在せざりしもの、如し。然るに若し紀州街道にして古くより發達して人馬の來往頻繁なりしならんか、天下茶屋附近は大阪と住吉との中間に位し、且つ其の西方には勝間村の村落發達せるあれば、茶店の如きも必らずや早くより存在すべき筈なるに事實は然らざりしもの、如し。

斯くて以上述べたる所に依りて之を推究せんか、現今の紀州街道が何れの時代に發達したりかは自ら判然すべし。即ち紀州街道が著しく發達して旅客の往來頻繁となるに至りしは、戦國の頃より豊臣時代にかけての事なるは何人も疑ふ可からざる所なり。従つて新家の始めて村落として發達せし時代も、略之に依つて想像し得らるべし。

既にして南方なる堺港は足利時代より安土、桃山時代にかけて、我國唯一の開港場として、其の黄金時代を現出せしかば、當時にありては堺より大阪、京都其の他各地への交通最も頻繁を極め、従つて其の主要通路たる紀州街道に面し、而かも住吉神社の社頭に連れる新家の繁昌亦日に盛なるものあり。尋

いで秀吉の大坂城を築くや、堺の繁昌は轉じて漸次大阪に奪はれしかば、堺への旅客は幾分減じたりと雖も、尙ほ其の繁榮も容易に衰ふる事なきのみならず、海外貿易の益々盛なるに及び航海業亦從つて興り、古來船舶の守護神として船主、航海業者の信仰厚き住吉神社は大阪、堺等は勿論、各地より群詣する者頗る多く、之等の者は參詣の途次、或は阪堺間往復の途中、必らず新家の茶店に立寄りて憩ふを常とせしかば、新家は益々繁昌を加ふるに至れり。斯くて後更に世は徳川時代となり三百年間の泰平の夢を結ぶに至るや、國民は漸次安逸に流るの傾向を生じ、茲に從來の新家の茶店は何時しか料亭と變り、旅客並に社參の客は素より四時遊容の來遊するもの多く、遂に徳川の中世以降は新家の繁昌全たくその極に達するに至れり。而して當時の狀況に就いては既に掲げたる攝津名勝國會の記事に依つて、略之を想像し得れば敢て茲に贅筆を要せざるべし。尙ほ此の地の料亭、茶店の主なるものを擧ぐれば三文字屋、伊丹屋を始め戒屋、堺屋、住吉屋、天王寺屋、分銅屋、昆布屋、丸屋等なりき。

斯くて新家の繁昌は明治維新の頃まで變る所なかりしかば、今尙ほ古老の間には其の盛なりし様を記憶するもの多し。然るに維新後急に此の地が衰退して、遂に明治二十三年の交には全たく昔日の面影を没するに至れり。而して其の急に衰微せる所以は、是れ全たく交通機關の變遷に依るものにして、即ち昔時の交通機關は極めて幼稚なるものにして、漸やく駕丁及び舟あるのみなりしかば、大阪より住吉社參の客は早朝家を出でて、徒歩或は駕籠に依つて紀州街道を通り、天下茶屋を経て新家に來り、或は

舟に依つて十三間川を逆り共に先づ奥天神に詣で、大海神社を拜し、更に神宮寺を経て住吉神社に祈願を籠め、歸途は西の鳥居より出でて新家に至り、旗亭或は茶店に立寄りて晝食を喫し、疲れを休めて夕刻家路に就くを常とせり。然るに明治初年人力車の發明せらるゝあり、或は馬車の用ひらるゝ等、交通機關の發達するに及び、社參の客は多く之に依れるがために、從來一日を要せし住吉參りも半日にて足る事となり、更に明治十八年には南海鐵道の前身たる阪堺鐵道の開通するものあり、而かも住吉停車場を此の地に設けられしかば交通の便益々開けたりと雖も、之がために反つて新家の料亭等は淋れて、遂に同二十八年の頃には茶店料亭等は殆んど其の跡を見ざるに至れり。

尙ほ最後に特筆すべきは、明治二十二年二月十五日畏くも昭憲皇太后の住吉に行啓あらせられ、親しく住吉神社に御參拜あらせられし砌り、此の地三文字屋（今は全然其の建物もなく住吉警察署の敷地となる）の一部を修理して、同所に御小憩あらせられしことなりとなす。

第五章 行政

所屬郡の沿革

本村は今西成郡に屬すれどもこは後世の事にして、もと住吉郡の屬邑なりしを後に西成郡の所屬に移